

# “Resilience”の理解とその人間像を目指して

私は国際機関に約30年間従事し、昨年2015年に母校関西学院に縁あって、教鞭を取る機会に恵まれました。国連赴任中、戦争や災害で苦しんでおられる方々とも、生活・仕事をしてきましたが、中でも世界の6割以上の自然災害はアジアで発生しており、多大な損害と犠牲者をたびたび出しますが、その都度、力強く復興を遂げております。

特に、日本の“Resilience”―復興能力は世界でも高く評価されており、東日本の震災では、各種の報道において冷静かつ整然とした態度や行動が、大規模な災害にも冷静な国民性として世界世論から賞賛を受けました。国際的に通用する日本人の“Resilience”―「うたれ強さ」とは、危機に臨んでも、簡単には、くずれない強さ、他人を思いやる優しさと包容力、引きずらないで、気持ちを切り替えて次に機会を見出す。まさに「苦しい状況においても歯を食いしばって次の機会を窺う解決能力」、この要素こそが“Resilience”の神髄であり、今後の関西学院で育成すべき人材の指針となるのではないのでしょうか。

私たち教職員は、一般的に「打たれ弱い」学生に直面することが多々あります。人生の目標は自己で勝ち取るという責任、すなわち「幸せになる」ために培う経験と勉強です。それを他人任せにしない責任感ある人に育つよう、学生たちを、勇気をもって厳しく指導することは実に手間がかかります。その手間を「面倒だ…」という言葉で逃げていないのでしょうか。

複雑多岐にわたる問題が混在する今日、問題解決に挑戦していく人材を育成するために、その「面倒」な指導をしてこそ、教職員は「伯楽」として尊厳を勝ち取ることができると考えます。教育の結果は短期的な人気投票では測れません。「時代を読む力」は教育の先行投資として、教職員に指導され、学生自らが“Resilience”を経験し、実践することで分析力と判断力が身につくのです。

学生諸君はこの「打たれ強い」人間像を目指し、厳しく指導されることを特権と認識し、問題に挑戦していく自己を誇りに思うことが重要です。“Resilience”精神を育む関学の教育内容と実践を教職員・学生が相互に協力・強化してこそ、“Mastery for Service”の本質が見えてくるのではないのでしょうか。